次回の定期演奏会をちょっと予習


©Rowland Kirishima


©Akira Muto

第222回定期演奏会　異国の香り

2027年1月23日（土）13：45開場　14：30開演
指揮/大友 直人　ピアノ/萩原 麻未*
サン＝サーンス：ピアノ協奏曲第5番ヘ長調Op.103「エジプト風」*
リムスキー＝コルサコフ：交響組曲「シェエラザード」Op.35

仲道郁代さんと阪哲朗さんをお迎えして、ベートーヴェンの《皇帝》《運命》という王道の傑作ふたつをお愉しみいただいている本日‥‥に続きまして、次回の定期演奏会は年明け（1月23日）、こちらも素晴らしいゲスト陣をお迎えしての公演となります。―― 題して《異国の香り》。世界を旅した音楽家でもあったサン＝サーンスのピアノ協奏曲第5番《エジプト風》と、海軍士官候補生として遥かな海の旅を経験したリムスキー＝コルサコフが、遠いアラビアの幻想から想を得て書いた交響組曲《シェエラザード》をお届けします。

サン＝サーンス作品でピアノ独奏を弾いていただくのは、ヨーロッパで研鑽を積んで豊かな才能を開花させた萩原麻未さんです。由緒あるジュネーヴ国際音楽コンクールで日本人初優勝を勝ち得たデビュー期から、大胆なほどに作品の奥をつかんで我がものと表現してみせ、豊かな感性ほとばしる演奏で高く評価されてきたピアニストです。さらに経験を重ねての熟練が今回、サン＝サーンス作品の豊かで精妙な色彩をホールいっぱいに響かせてくれるでしょう!

そして、指揮台にお迎えするのは、セントラル愛知交響楽団への客演でも大好評を博している名匠・大友直人さんです。―― 古典の名曲から現代の新作まで、積極果敢に挑み続けてきたマエストロ大友は、そのノーブルな存在感と頼もしさだけでなく、音楽の芯をぐっと熱くつかみ出して、聴き手を包むように大きく響かせてみせる音楽を創るひと。長年にわたって常任指揮者を務めた東京交響楽団をはじめ、同じく常任指揮者を務めた京都市交響楽団（現・桂冠指揮者）、音楽監督としてオーケストラの変革期を率いた群馬交響楽団、やはり長らく音楽監督として実力を磨き続ける琉球交響楽団‥‥と、各地のオーケストラでじっくりと錬磨に取り組み、若い音楽家たちの育成にも力を注ぎ‥‥と、日本の音楽文化を支え続けてきた名指揮者です。豊かな経験を円熟へと融かすマエストロ大友が、セントラル愛知響からどのような新しい表現を引き出すのか‥‥ぜひホールで体感していただきたいと思います。

◆異邦の薫りを響かせて ―― 〈外側〉への驚きや好奇心

〈エキゾチック〉という言葉があります。外国らしい感じ、異国的なさま、といった意味ですが、そこには主に〈憧れ〉の気持ちをこめて用いる‥‥と辞書にはあります。ヨーロッパのクラシック音楽でも、ずいぶん昔から、異国の雰囲気や文化への好奇心や憧れを反映した、〈エキゾチシズム（異国趣味、異国情緒）〉の傾向をみせる音楽がありました。

たとえば〈トルコ風〉。オスマン・トルコ帝国が勢力を拡大した16世紀には、神聖ローマ帝国の本拠地であるウィーンも、2度にわたってオスマン・トルコ帝国軍に包囲されるという危機に直面しています。そんな記憶がヨーロッパに非常なインパクトを残しており、トルコ軍の軍楽隊が各地に残した音楽の記憶が、時を経てエキゾチックな音楽の象徴ともなってゆきます。モーツァルトのピアノ・ソナタ《トルコ行進曲つき》、ヴァイオリン協奏曲第5番《トルコ風》、オペラ《後宮からの誘拐》‥‥といった人気作品たちは、そんなエキゾチシズム（異国趣味）のあらわれです。

ヨーロッパ人の異国趣味は、トルコにとどまりません。ヨーロッパから見た〈外側〉‥‥アジアやアフリカなど、広い世界の文化への驚きや好奇心、憧れなどが反映した絵画や文学、音楽などがどんどん生まれていきます。次回定期でお楽しみいただく2曲は、そんな〈異国の香り〉への憧れを響かせた音楽なのです。

◆ナイル河のほとりで聴いた、あの歌 ―― サン＝サーンス《エジプト風》に響く愛の歌

フランスの作曲家カミーユ・サン＝サーンス（1835～1921）は、たくさんのオペラや交響曲、交響詩からピアノ曲に致るまで、あらゆるジャンルに膨大な作品を残した人ですが、頻繁な演奏旅行や休暇など、フランスにとどまらず世界中を旅した人でもありました。フランスからもほど近い北アフリカには頻繁に訪れていたのをはじめ、南北アメリカや東南アジアまで足をのばして、〈異国の香り〉を直に現場で体感

しています。そんなサン=サーンスの作品に、エキゾチシズム（異国趣味）が溢れているのも当然のこと。《アルジェリア組曲》、《アフリカ幻想曲》、軍隊行進曲《ナイル川の岸辺》‥‥と北アフリカを題材にした音楽だけでもあれこれあるのですが、その代表作が次回定期でお聴きいただくピアノ協奏曲第5番ヘ長調《エジプト風》（1896年）です。

明るく生き生きと自在闊達な第1楽章は、特にエジプト風には感じられないのですが‥‥第2楽章で納得されるはず。ピアノが弾く音階は明らかに非ヨーロッパ的ですし、中間部ののびやかな歌は、サン=サーンスいわく「ナイル河を下ったとき船上にきいたヌビア人の愛の歌」とのことですし、こまやかな伴奏型は、作曲者がスケッチしたコオロギの鳴き声が基になっているとか。ハーモニーにも特殊な工夫がされていて、これぞ異国情緒！という響きがするのです。

異国情緒を別としても、ピアノ協奏曲としてとても魅力的な作品ですから、ピアニストとオーケストラの妙技を満喫していただけるはず。サン=サーンスの異国情緒についてご興味のあるかたは、『講座 20世紀の芸術 1:芸術の近代』［岩波書店、1989年］に、椎名亮輔「近代西欧音楽におけるエグゾティスムの諸相」という面白い論が載っていますので、図書館などでぜひお読みください。

◆アラビアの幻想、海を越える音の絵巻 ―― 《シェエラザード》の壮大な響きへ！

異国へのまなざしを強く響かせた作曲家といえば、ロシアの作曲家ニコライ・リムスキー＝コルサコフ（1844～1908）もその一人です。彼は音楽家になる以前、まず海軍兵学校を出て士官候補生となり、遠洋航海に出て青春の数年間を過ごしていました。ドイツ、イギリス、はるばる大西洋を渡ってアメリカへ‥‥と軍艦で巡航した海の日々は、彼の創作にも大きな航跡を残します。

若い頃から東洋趣味への憧れが強かった彼は、アラビアの詩人を題材にした交響組曲《アンタール》を書いた時にアラビア音楽の本を熱心に読んでアルジェリア民謡を研究し、その後の創作でも東洋趣味を色濃く表しています。その最大の成果が、次回定期でお愉しみいただく交響組曲《シェエラザード》（1888年）です。

この曲が霊感を得たのは、9世紀のアラビアで生まれた『アラビアン・ナイト（千一夜物語）』です。―― ペルシャのシャーリアール王は、新たな妻と結婚しては翌朝に殺害し、という残虐なことを繰り返していましたが、美しいシェエラザードと結婚したときはそうもいきません。寝室で長い物語を王に語ってきかせる彼女は、夜明けになると物語をやめてしまうのです。続きがききたくて仕方ない王は、一晩また一晩と話にきいってしまい、とうとう忍耐と寛容とを身につけ彼女を殺すことなく、幸せに暮らすのでした‥‥というのが大枠。そのなかでシェエラザードが語る様々な物語から、触発されて生まれた音楽が《シェエラザード》です。

ところが本作、4つの楽章から成るものの、特定の標題はありません。ご自由に想像を‥‥というわけですが、いちおう各楽章に《海とシンドバッドの船》《カレンダー王子（カランダール公）の物語》《若い王子と王女》《バグダッドの祭 ―― 海 ―― 船は青銅の騎士のある岩で難破 ―― 終曲》というタイトルが（発表当初には）添えられていて、なるほどそんな雰囲気を彷彿させる音楽になっています。

音楽の異国趣味にご興味あるかたは、Jonathan Bellman (ed.) "The Exotic in Western Music" [Northeastern University Press, 1998] や、Ralph P. Locke "Musical Exoticism : Images and Reflections" [Cambridge University Press, 2009] という基本文献をはじめいろいろな研究書もありますし、次回定期の曲目解説にも詳しいかと思いますが‥‥ふたつとも予習なしで存分に愉しめるカラフルな音楽絵巻なのでご安心を。ぜひ、次回もこのホールでご一緒に体感いたしましょう！

やま の たけひろ
山野雄大

Profile

ライター［音楽・舞踊評論］。『レコード芸術 ONLINE』『バンドジャーナル』『音楽の友』など雑誌・新聞への寄稿をはじめ、NHK・FM「オペラ・ファンタスティカ」他ラジオ出演も。第一生命ホールでのコンサートシリーズ《雄大と行く 昼の音楽さんぽ》ナビゲーターほか、CDや公演の解説、朝日カルチャーセンターでの音楽講座、歌詞対訳など多数。レイディエート・フィル正指揮者ほかアマチュア・オーケストラの指揮も。

